

日本の SEL のこれまでとこれから ——日本 SEL 研究会から日本 SEL 学会へ——

宮崎 昭 （日本 SEL 学会会長・環境とところとからだの研究所代表）

History and future of the Japanese Association of Social-Emotional Learning

Abstract: This article provides an overview of the activities of the Japanese Group of Social-Emotional Learning (JSEL), which has been involved in research and practice in the field of social-emotional learning (SEL) in Japan. Many researchers gathered, and through repeated exchange and practice, the number of programs and practices that advocate SEL has increased dramatically.

In addition, the article describes the development and activities of the Japanese Association of Social-Emotional Learning (JSEL), as well as its vision for the future. Natural sciences such as mathematics and science have developed as common knowledge for all humankind, and natural science education is provided in a common way throughout the world. On the other hand, the way we feel and think about culture, the economy, and values is diverse depending on differences in country, ethnicity, religion, etc. It is necessary to establish “social-emotional learning (SEL)” as a standard common to all humanity as a way of learning to solve the problems and conflicts that arise from this diversity in a safe way.

Keywords: Social-Emotional Learning : SEL, History & Vision, Japan

日本 SEL における「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning : SEL)」の研究と実践の歴史について、日本 SEL 研究会 (JSEL) の活動を概観した。多くの研究者が集い、交流と実践を重ねて、SEL を標榜するプログラムと実践が飛躍的に増えた。

さらに、日本 SEL 学会 (JSEL) への発展と活動ならびに未来へのビジョンを述べた。数学や科学などの自然科学は、人類共通の知識として発達し、世界で共通の自然科学教育が行われている。一方、文化や経済や価値観に関する感じ方・考え方は、国や民族や宗教などの違いによって多様である。その多様性が生み出す問題や紛争を、安全に解決するための学習として「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning : SEL)」を人類共通の標準として確立していくことが必要である。

キーワード： 社会性と情動の学習，歴史と展望，日本

日本 SEL 研究会の歴史

日本 SEL 研究会の発足

日本 SEL 学会の前身である日本 SEL 研究会 (Japanese Group of Social-Emotional Learning) は、2009 年 9 月 1 日に発足した。日本 SEL 研究会設立趣意書 (2009) には、次のように書かれている。

「SEL (Social-Emotional Learning) とは、『情動』の認知と扱い方ならびに他人との共感的な思いやりのある『対人関係』を学習することです。『社会性と情動の学習』と訳します。こころの知能 (EQ) や愛着などの心理学研究から、『情動』が人々と組織を動かす重要な要因であることが明らかになっています。また、ソーシャルスキルトレーニングによる学習が対人関係スキルを発達させることが示されています。さらに SEL は、子どもたちが、社会性を学ぶとともに学習面での成果を上げる上でも重要であることが明らかになっています。こうした『社会性と情動の学習 (SEL)』の研究を推進し、その普及に貢献することを目的として日本 SEL 研究会を設立いたしました。」

発足以来、多くの研究者や実践者の協力の元、下記のように毎年の研究大会開催、関連学会でのシンポジウム等の発表、国際学会での発表など、社会性と情動の学習 (SEL : Social-Emotional Learning) の研究と実践の普及に尽力してきた。

日本 SEL 研究会研究大会

第 1 回大会 (2009 年 10 月 25 日 : 国立オリンピック記念青少年総合センター) では、SEL プログラムのひとつであるセカンドステップの実践を中心として、シンポジウム「セカンドステップの広がり」と SEL が行われた。話題提供は、「品川区における実践」伊藤聡 (品川区教育委員会)、「吉原林間学園における小

グループ活動の取り組み」杉山彩子 (吉原林間学園)、「アメリカにおける SEL 研究と SEL プログラム」宮崎昭 (山形大学) であった。また、ポスター発表「セカンドステップ実践者の動向から探る SEL の需要」CFCJ 事務局 (NPO 法人日本子どものための委員会)、「児童養護施設におけるセカンドステップの展開と意義」木村秀 (東京都勝山学園)、「特別支援学級での実践～セカンドステップを生かした国語科の授業の取り組み～」竹田文子 (山形県谷地中部小学校)、「セカンドステップー親子塾の実践」所澤保孝 (関東学院大学)、「保育実践におけるセカンドステップの活用」味水智子 (むつみ保育園)、「社会性と情動の学習 SEL (Social-Emotional Learning) の発展と研究」宮崎昭 (山形大学) が行われた。

第 2 回大会 (2010 年 10 月 31 日 : 国立オリンピック記念青少年総合センター) では、アメリカ・シカゴのイリノイ大学シカゴ校に訪問研究員として滞在し、Social-Emotional Learning の概念を提案した CASEL の主要メンバーであるワイスバーグ教授のもとで研究した小泉令三 (福岡教育大学教授) が基調講演「日本の SEL 研究の動向—SEL8S の視点から—」を行った。その後のプログラムは、シンポジウム「社会性と情動の学習 (SEL) とは」話題提供「乳幼児期のソーシャル・エモーショナルラーニング」村川京子 (大阪薫英女子短期大学)、「社会性と情動の学習 (Social Emotional Learning)」宮崎昭 (山形大学) だった。

第 3 回大会 (2012 年 3 月 10 日 : 国立オリンピック記念青少年総合センター) では、オーストラリアの SEL プログラムを展開されている松本有貴 (パスウエイズジャパン代表) が基調講演「ファンフレンズ プログラム」を行った。その後のプログラムは、ミニ講演「東日本震災後の心のケア」宮崎昭 (山形大学)、「指定研究発表「セカンドステップの導入

上の課題」木村友則（山形県スクールカウンセラー）、渡部規子（山形県中央児童相談所）だった。

第 4 回大会（2013 年 3 月 3 日：国立オリンピック記念青少年総合センター）では、ソーシャルスキルトレーニングに造詣の深い渡辺弥生（法政大学）が基調講演「幼児の社会性と情動の発達」を行った。その後のプログラムは、シンポジウム「乳幼児の社会性と情動の発達」話題提供「幼児版セカンドステッププログラム」宮崎昭（山形大学）、「自閉症幼児の情動発達の研究から」高橋ゆう子（大妻女子大学）、「幼児の情動発達と絵本の役割」佐々木宏子（鳴門教育大学）だった。

第 5 回大会（2014 年 3 月 2 日：国立オリンピック記念青少年総合センター）では、いじめ問題を中心に Neil Humphrey & Dr. Ann Lendrum（Manchester Institute of Education, UK）の基調講演“Using social and emotional learning to prevent bullying in schools”と、戸田有一（大阪教育大学）の基調講演「いじめ研究と対策実践の現状と課題」が行われた。その後のプログラムは、研究発表「セカンドステップ幼児用の効果」塩崎紗弓・宮崎昭（山形大学）だった。

第 6 回大会（2015 年 3 月 1 日：国立オリンピック記念青少年総合センター）では、「SEL 研究の到達点と将来展望」と題して、パネリストとして山崎勝之（鳴門教育大学）「予防教育プログラム『TOP SELF』」、柳沼良太（岐阜大学）「SEL と道德教育」、山野則子（大阪府立大学）「SEL と社会福祉」に話題提供をいただき、ディスカッションを行った。その後のプログラムは、研究発表「幼児向け SEL プログラム開発研究」山田洋平（梅光学院大学）、「SEL 実践研究」眞榮城和美（清泉女学院大学）、「エビデンスベースの生徒指導への展望—海外視察から—」山崎茜（広島大学）、「SEL

といじめ防止」佐藤浩一（日本こどものための委員会）だった。

第 7 回大会（2016 年 3 月 6 日：国立オリンピック記念青少年総合センター）は、「日本における SEL 研究の現状」をテーマとした研究発表だった。発表者と題目は、「オーストラリアの SEL プログラム YOU CAN DO IT の紹介」山本利枝（千葉大学子どものこころの発達教育センター）、「マインドフルネススペースの SEL 作成のために：教育現場のニーズ」加藤起運（千葉大学子どものこころの発達教育センター）、「REBT ベースのプログラム OK s：50 分の授業で生徒はかわる」三尾眞由美（千葉大学子どものこころの発達教育センター）、「特別支援教育における SEL 教育」宮崎昭（山形大学）、「居場所作りから SEL の必要性を考える」石本雄真（鳥取大学）、「予防的心理教育プログラムの実施と維持」小泉令三（福岡教育大学）だった。

第 8 回大会（2018 年 3 月 4 日：早稲田大学）では、山口創（桜美林大学）が基調講演「触れることと情動のかかわり」を行った。その後のプログラムは、シンポジウム「SEL の実践と展望」話題提供「SEL の治療教育プログラム児童養護施設での実践」宮崎昭（山形大学）、「日本で SEL が広がるために」石本雄真（鳥取大学教員養成センター）、「障害児学級での SEL の介入～不登校傾向だった発達障害児 Y の変容～」西田千寿子（和歌山県公立小学校）と、研究発表「中学校におけるスクールカウンセラーの予防教育への取り組み—SEL がレジリエンスに与える影響について—」小高佐友里（法政大学大学院）、「セルフ・コンパッションと援助要請の関連」佐藤修哉（日本学術振興会／東京成徳大学）、「中学生に対する Mindfulness 瞑想を用いた Universal 予防介入によるメンタルヘルスへの効果について」加藤起運（大阪大学大学院）、「感情コントロー

ルのサポート,心と身体の繋がりをふまえて」
瀧澤悠 (University of Queensland) だった。

第 9 回大会 (2019 年 3 月 3 日: 早稲田大学) では, 越川房子 (早稲田大学) が基調講演「マインドフルネス—基本理論と教育領域への適用—」を行った。その後のプログラムは, シンポジウム「マインドフルネスの実践の可能性と展望」話題提供「小学校低学年でのマインドフルネスの取り組み」渡辺信一 (大阪府立菟茂市立南小学校), 「ボディワークの視点から見る, 芸術・スポーツ界への応用」廻起倫沙包 (マインドフルネス・クリエイター), 「子どもを対象としたマインドフルネスプログラム『b(Mindfulness in School Project)』の概要と小学生への実践」芦谷道子 (滋賀大学) と, 研究発表「多層的な支援システムの構築に向けた試み—シンガポールを事例として」堀口真理 (前シンガポール教育省), 「SEL プログラム YOU CAN DO IT レジリエンスプログラム (日本版) の紹介と小学校の実践」渡辺梨沙 (足立区立平野小学校)・山本利枝 (千葉大学), 「心理予防教育 OKS の特性不安に与える影響」三尾眞由美 (千葉大学大学院), 「知的障害特別支援学校高等部生徒を対象としたアセスメントに基づく SEL プログラムの実践とその効果」長谷沙希 (青森県立青森第二養護学校) だった。

第 10 回大会 (2020 年 3 月 8 日: 福岡教育大学) 新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するため中止となった。

第 11 回大会 (2021 年 3 月 7 日: オンライン開催) では, 池田真依子 (Integral Psychoeducational Services California, US) が基調講演「コロナ禍における SEL の活用—あるアメリカ・カリフォルニア州公立学校の事例—」を行った。その後のプログラムは, シンポジウム「レジリエンスを支える—困難状況で自分をてばなさないために—」において話題提

供「投影法を中心としたグループ・アプローチを用いて, 自分らしいレジリエンスへの気づきと促進を目指した予防的心理支援の取り組み」平野真理 (東京家政大学), 「BASIC-Ph ストレスコーピングモデル—レジリエンスの 6 つのチャンネル」新井陽子 (BASIC Ph Japan) と, 研究発表「大学生のレジリエンスとその関連要因ならびに社会性と情動の学習による変化—大学のオンライン授業を通しての実践研究—」宮崎昭 (立正大学), 「実態調査から見える子供の潜在的レジリエンスに関する考察」山本利枝 (千葉大学), 日本の子どもを対象とするスターリング子どもウェルビーイングスケール(SCWBS)の信頼性と妥当性の予備的検証」西田千寿子 (大阪大学)・石本雄真 (鳥取大学)・瀧澤悠 (鳥取大学)・松本有貴 (徳島文理大学)・片山泰一 (大阪大学), 「高校 1 年生を対象とした『SEL-8Career』の作成と実践」伊藤衣里子 (福岡教育大学大学院/福岡県立稲筑志耕館高等学校)・小泉令三 (福岡教育大学), 「校内生徒支援室の生徒を対象とした SEL-8S プログラムの実践」重富かおり (福岡教育大学大学院/新宮町立新宮中学校)・小泉令三 (福岡教育大学), 「SEL プログラムの効果がない子どもたちをどう支援するか—心理学と神経科学の融合からのヒント—」瀧澤悠 (鳥取大学) だった。

第 12 回大会 (2022 年 2 月 27 日: オンライン開催) では, 小西千秋 (マギル大学, カナダ) が基調講演「SEL 教育の現状: 北米から」を行った。その後のプログラムは, シンポジウム「日本の教育に SEL (社会性と情動の学習) を定着させるには」話題提供「学校心理学における SEL—日本の教育に SEL を定着させるには」石隈利紀 (東京成徳大学), 「日本の教育に SEL を定着させるには」渡辺弥生 (法政大学)・小高佐友里 (奉仕大学大学院ライフスキル教育研究所)・澤田葉月 (法政大学

大学院), 指定討論「海外の動向, 子どものウェルビーイングの研究, 教員・保育士養成課程における SEL 演習」松本有貴(徳島文理大学)と, 研究発表「キラキラルームにおける SEL 楽しく元気になるレッスンの実践」岡久友紀(徳島文理大学大学院), 「大学生のレジリエンスとその関連要因ならびに社会性と情動の学習による変化(その2)ー大学のオンライン授業を通しての実践研究ー」宮崎 昭(立正大学), 「子どもを対象として実施されたユニバーサル SEL プログラムのメタ分析」瀧澤悠(鳥取大学)・松本有貴(徳島文理大学)・石本雄真(鳥取大学)だった。

第 13 回大会(2023 年 2 月 25 日: オンライン開催, 対面参加会場 Wework アイスバーグ)では, Patrick Newell(教育活動家・TEDxTokyo 代表)が基調講演「日本の未来に貢献する SEL: Discovering the role of SEL in developing Creative Collective Intelligence(創造的集団知の開発における SEL の役割の発見)」を行った。その後のプログラムは, シンポジウム「多様な設定と連携により広がる SEL の可能性」話題提供「自由が丘学園高等学校での SEL の取り組み——OECD SSES——」今井朝子(自由が丘学園高等学校), 「現場から感じた連携の重要性——子どもの居場所機能強化につながるもの——」船渡圭子(和歌山県学童保育連絡協議会), 「発達障害児の不安軽減を目的とした SEL に関する産学協同研究」山根隆宏(神戸大学)石本雄真(鳥取大学), 研究発表「キラキラルームにおける SEL 楽しく元気になるレッスンの実践」岡久友紀(徳島文理大学大学院), 指定討論「コラボレーションの理想と現実: SEL 実践・研究における視座の再考」笹尾敏明(国際基督教大学), 研究発表「きらきらルームにおける SEL 『ポジティブレッスン』の実践」相曽成陽(徳島文理大学大学院), 「子どもが変わるとき SEL

の実践から」三谷安希(みなべ愛之園こども園), 「情動が生まれるプロセス」宮崎 昭(立正大学)だった。

第 14 回大会(2024 年 3 月 3 日: オンライン開催)では, 川端雅人(立教大学)が基調講演「Well-being と SEL: スポーツ心理学の視点から」を行った。その後のプログラムは, パネルディスカッションにおいてパネラー「子どもの Well-being の研究調査(アジアの 8 か国)を中心に」小川淳子(ベネッセ教育総合研究所), 「子どもの Well-being の研究から」木村直子(鳴門教育大学), 「Second Step の実践を中心に教育現場より」千田伸子(セカンドステップ), 「SEL の観点からの Well-being 向上の研究をもとに」松本有貴(徳島文理大学)の発表と協議, ならびに研究発表「個人の well-being と平和な社会を実現するための Social, Emotional, and Ethical Learning ——学校教育における社会性と情動の学習と倫理的価値教育の新たな可能性——」山本夏希(上智大学大学院), 「SEL 実装におけるエビデンス活用の実態と今後の可能性〜CASEL・EEF の SEL 実践ガイドの比較分析から〜」森俊郎(名古屋大学/養老町立東部中学校)・山田洋平(福岡教育大学), 「社会性と情動の学習(SEL)の研修とその実践における課題」宮崎昭(環境とところとからだの研究所), 「児童期における認知的感情制御方略と抑うつ, 自尊感情の関連ーSEL の授業を通してー」青木結那(都留文科大学), 「幼児に向けた SEL プログラムの開発 ～くまのこプログラムについて～」西田千寿子(新庄第二小学校)・船度圭子(白浜町学童保育)・三谷安希(みなべ愛之園こども園)が行われた。

日本 SEL 研究会研修会

会員向けに, 次のような研修会を開催してきた。

身近なところから効果的に行う子どもの心サポート～最新の心理学と神経科学研究からの理解～ (2021 年 7 月 3 日(土) ないし 8 月 21 日(土) 20:00-21:30 オンライン) では、瀧澤悠 (鳥取大学地域学部附属子どもの発達・学習県センター) を講師として研修会を行った。

HSP (Highly Sensitive Person) の考え方 (2021 年 9 月 11 日(土) 20:00-21:30 オンライン) では、一社会情緒的発達の多様性を理解する手掛かりとして一を副題として、飯村修平 (東京大学・日本学術振興会 PD) を講師として研修会を行った。

開発途上国や緊急下の教育 における SEL の意義, 実践例 と課題 を通した日本の教育への示唆 (2022 年 5 月 21 日(土) 19:30-21:30 オンライン) では、岡本 啓 (UNHCR; 国連難民高等弁務官) を講師として研修会を行った。

思春期の親子をつなぐマインドフルネス子育て講座」ファシリテーター養成講座 (2022 年 8 月 6 日～7 日オンライン) では、南谷則子 (千葉大学) と高橋靖子 (愛知教育大学) を講師として研修会を行った。

HSC 気質の児童生徒とレジリエンス教育——感受性の高さがもたらすもの—— (2022 年 12 月 17 日(土) 19:30-21:30 オンライン) では、岐部智恵子 (お茶の水女子大学講師) と鈴木水季 (郁文館夢学園スクールカウンセラー) を講師として研修会を行った。

学習会 会員の交流を主目的として、オンラインでの会員同士のコミュニケーションを大切にした学習会を随時行ってきた。

日本 SEL 研究会出版物

SEL 研究第 1 号 (2011) は、以下の内容で発行された。原著は「日本における社会性と情動の学習 (SEL) の研究」宮崎昭 (山形大学) と “Cultural Considerations in Social Emotional

Learning” Amand Clinton (University of Puerto Rico, Mayagüez, Puerto Rico) の 2 本である。資料は、「セカンドステップ—親子塾の実践」所澤保孝 (関東学院大学), 「特別支援教育におけるソーシャルスキルトレーニングの意義—セカンドステップを生かした国語科授業での取り組み—」竹田文子 (山形県河北町立谷地中部小学校) の 2 本であった。

ニュースレター 毎月、オンラインニュースレターを発行した。会員が、自由掲示板 (関連の研修会案内を含む), 書籍情報等, 関連学会情報, 会員の実践活動などに投稿すると共に, 研究コラムが掲載された。

関連学会での活動

日本教育心理学会 日本 SEL 研究会の理事が中心となって自主企画シンポジウムの例を挙げる。

石本雄真, 松本有貴, 山本利枝, 宮崎昭, 青山郁子 (2017) 心理教育を子どもたちにいかに届けるか?.

石本雄真, 山根隆宏, 山田洋平, 松本有貴, 鈴木水季, 渡辺弥生 (2018) 知的能力——何を育みどのように子どもたちの幸福に貢献するのか——.

石本雄真, 山根隆宏, 山田洋平, 松本有貴, 鈴木水季, 渡辺弥生 (2018) SEL が育む非認知的能力——何を育みどのように子どもたちの幸福に貢献するのか——.

松本有貴, 宮崎昭, 原田恵理子, 高橋あい, 大川真知子, 渡辺弥生 (2019) 援助ニーズが高い人へのソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL) ——SEL の多面的応用とその効果検討——.

石本雄真, 松本有貴, 小林朋子, 宮崎昭, 渡辺弥生 (2021) 子どもたちのポジティブな側面を伸ばす心理教育実践——学校でのソーシャルエモーショナルラーニング (SEL) 実践

——.

瀧澤悠, 松本有貴, 山根隆宏, 石本雄真, 澤田葉月, 金子紗枝子, 細川陸也 (2022) 多様な場で感情と社会性を育む SEL 実践——SEL の可能性を探求する (1) ——.

小泉令三, 山田洋平, 西山久子, 松本有貴, 宮崎昭 (2022) 自治体規模での実践から学ぶ日本らしい社会性と情動の学習 (SEL) 実践とは?.

西山久子, 渡辺弥生, 西田千寿子, 渡邊直美, 平井陽伸, 伊藤久仁子, 利根川明子, 小西千秋 (2023) Social Emotional Learning (SEL) の教育実践を規定するコア・コンポーネントに迫る——どのような教材・指導案・カリキュラムがあると SEL は成立するのか? ——.

また, 研究会メンバーによるここに記載していない自主企画シンポジウムや学会発表が多数行われている。

日本心理臨床学会 アメリカから, 社会性と情動の学習 (SEL) を専門とする David Osher 氏 (American Institutes of Research) を招聘して, 実行委員会企画シンポジウム「Osher,D., 小泉令三, 松本有貴, 宮崎昭 (2019) 予防教育『社会性と情動の学習 (SEL : Social-Emotional Learning)』. 第 38 回大会 発表論文集」が行われた。

日本心理学会 チュートリアルワークショップとして次の 2 件が行われた。

渡辺弥生 (2021) 我が国で実施されるソーシャルエモーショナルラーニング教員の力量を高め, 生徒への教育効果を高める. 日本心理学会第 85 回大会。

宮崎昭, 小泉令三 (2022) 社会性と情動の学習 理論と実践. 日本心理学会第 84 回大会。

International Congress of Psychology (ICP) ICP2016 と ICP2020 の大会において, 次のシンポジウムが開催された。

Miyazaki, A., Matsumoto, Y., Aoyama, I.,

Ishimoto, Y., Tanaka, M. (2016) Social Emotional Learning. ICP2016Yokohama Program.

Miyazaki, A., Watanabe, Y., Watanabe, N., Takizawa, Y. (2020) SEL (social and emotional learning) Movements in Japan Principles in Japanese Context. ICP2020 Program.

Matsumoto, Y., Koizumi, R., Nishida, C., Ishimoto, Y., Yamane, T. (2020) SEL(Social and Emotional Learning) Practices in Japan, ICP2020 Program.

International School Psychology Association. 次のシンポジウムが開催された。

Ikuko Aoyama, I, Koizumi, R., Miyazaki, A., Takizawa, Y. (2018) Practice of Social-Emotional Learning (SEL) in Japan and challenges. ISPA2018, 40th Annual Conference of the International School Psychology Association.

その他の学会 上記以外にも, 日本発達心理学会, 日本カウンセリング学会等や国際学会において, 日本 SEL 研究会のメンバーが多数の発表をおこなっている。

日本 SEL 研究会役員等の関連書籍(出版年順)

会員の SEL に関するこれまでの主な著書をあげる。

M・J・イライアス他著, 小泉令三編訳 (1999)

社会性と感情の学習—教育者のためのガイドライン 39—. 北大路書房.

井部文哉編 (2006) キレない子どもを育てるセカンドステップ. NPO 法人日本こどものための委員会.

渡辺弥生編著 (2011) 子供の考える力, 感じる力, 行動する力を伸ばす子どもの感情表現ワークブック. 明石書店.

小泉令三 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL- 8 S① 社会性と情動の学習 (SEL- 8 S) の導入と実践. ミネルヴァ書

房.

小泉令三 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8 S②社会性と情動の学習 (SEL-8 S) の進め方 小学校編. ミネルヴァ書房.

小泉令三・山田洋平 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8 S②社会性と情動の学習 (SEL-8 S) の進め方 小学校編. ミネルヴァ書房.

小泉令三・山田洋平 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8 S③社会性と情動の学習 (SEL-8 S) の進め方 中学校編. ミネルヴァ書房.

小泉令三・山田洋平・大坪靖直 (2017) 教師のための社会性と情動の学習 (SEL-8T) 人との豊かな関わりを築く 14 のテーマ. ミネルヴァ書房.

松本有貴・石本雄真・島寄仁恵・瀧澤悠・西田千寿子 (2019) 子どもとつながる学校心理教育—考え方と具体的実践. せせらぎ出版.

Michael Bernard 著, 山本利枝・松本有貴訳 (2020) You Can Do It! Education program 小学生のための「レジリエンス」指導者ガイド. ティティエスレジリエンス研究所. 20 周年記念誌出版班 (2021) わたしの気持ちあなたの気持ちを学びあう セカンドステップ. NPO 法人日本こどものための委員会.

小泉令三・伊藤衣里子・山田洋平 (2021) 高校生のための社会性と情動の学習 (SEL-8C) キャリア発達のための学習プログラム. ミネルヴァ書房.

渡辺弥生・小泉令三編 (2022) ソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL) 非認知的能力を育てる教育フレームワーク. 福村出版.

松本有貴編著 (2024) ありがとうの力—学校

に笑顔を届けるウェルビーイング日記.

新評論.

日本 SEL 研究会歴代役員

日本 SEL 研究会の歴代役員は以下の通りである。

第 1 期役員 (2009 年 10 月～2012 年 3 月)

理事長：宮崎昭 (山形大学), 副理事長：所澤保孝 (関東学院大学), 理事：木村秀 (東京都勝山学園), 村川京子 (大阪薫英女子短期大学), 米田薫 (大阪青山大学), 監事：小山望 (東京理科大学), 渡辺俊一 (日本こどものための委員会), 井部文哉

第 2 期役員 (2012 年 4 月～2014 年 3 月)

理事長：宮崎昭 (山形大学), 副理事長：松本有貴 (千葉大学), 理事：木村秀 (東京都勝山学園), 小泉令三 (福岡教育大学), 高橋あつ子 (早稲田大学), 所澤保孝 (関東学院大学), 村川京子 (大阪薫英女子短期大学), 監事：小山望 (東京理科大学), 渡辺俊一 (日本こどものための委員会)

第 3 期役員 (2015 年 4 月～2018 年 3 月)

理事長：宮崎昭 (山形大学), 副理事長：松本有貴 (千葉大学), 理事：青山郁子 (静岡大学), 石本雄真 (鳥取大学), 伊藤亜矢子 (お茶の水女子大学), 岐部智恵子 (お茶の水女子大学), 木村秀 (東京都勝山学園), 小泉令三 (福岡教育大学), 重藤彩 (NOVA SOUTHEASTERN UNIVERSITY), 高橋あつ子 (早稲田大学), 村川京子 (大阪人間科学大学), 山崎勝之 (鳴門教育大学), 渡辺弥生 (法政大学) 監事：加藤起運 (明治大学附属明治高等学校・明治中学校), 渡辺俊一 (日本こどものための委員会)

第 4 期役員 (2018 年 4 月～2021 年 3 月)

理事長：宮崎昭 (立正大学), 副理事長：松本有貴 (徳島文理大学), 理事：青山郁子 (都留文科大学), 石本雄真 (鳥取大学), 伊藤亜矢子 (名古屋市立大学), 加藤起運 (早稲田大学)

学生相談室), 小泉令三 (福岡教育大学), 鈴木水季 (日本ポジティブ教育協会), 高橋あつ子 (早稲田大学), 山崎勝之 (鳴門教育大学), 山根隆宏 (神戸大学), 渡辺弥生 (法政大学)
 監事: 西田千寿子 (京都教育大学附属桃山小学校), 眞榮城和美 (白百合女子大学)

第 5 期役員 (2021 年 4 月~2024 年 3 月)

理事長: 宮崎昭 (立正大学), 副理事長: 松本有貴 (徳島文理大学), 理事: 青山郁子 (都留文科大学), 石本雄真 (鳥取大学), 加藤起運 (早稲田大学学生相談室), 小泉令三 (福岡教育大学), 佐藤修哉 (長野大学), 鈴木水季 (日本ポジティブ教育協会), 瀧澤悠 (鳥取大学), 山根隆宏 (神戸大学), 渡辺弥生 (法政大学)
 監事: 西田千寿子 (田辺市立第二新庄小学校), 眞榮城和美 (白百合女子大学)

日本 SEL 研究会をふりかえって

日本 SEL 研究会ができた 2009 年の頃は, 「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning: SEL)」の言葉はあまり知られていなかった。ソーシャルスキルトレーニングは一般的であったが, 「SEL プログラム」を名乗る教育プログラムは日本こどものための委員会の「セカンドステップ」しかなかった。その後, 2011 年に「小泉令三 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8 S①社会性と情動の学習 (SEL-8 S) の導入と実践. ミネルヴァ書房」が発行された。さらに, 研究大会のたびに SEL にかかわる多くの研究者が集い交流と実践を重ねて, 2025 年 3 月現在では, SEL を標榜するプログラムは飛躍的に増えてきた。一方, 実践では日本の学校現場には, 一部の学校や自治体を除けば, なかなか普及しなかった。むしろ, 発達障害の放課後等デイサービスや虐待を受けた子どもたちなど, 教育以外の場での実践が広がりその成果が見られた。近年, 日本 SEL 研究会の会員数も増

えて, すべての子どもたちの Well-being の基盤として, 学校教育に「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning)」を位置づける必要性がようやく認識されるようになってきた。

日本 SEL 学会への発展

日本 SEL 学会への発展

世界が, 戦争・紛争・分断, 貧富の格差, 飢餓や感染症, 環境汚染・気候変動などの問題に直面する中で, OECD は 2023 年度から 10 歳から 15 歳の生徒を対象に, 社会性と情動のスキル調査 (SSES; Survey on Social and Emotional Skills) を本格的に始めた。日本の教育では, いじめ・不登校, 自殺者数の増加, 家庭環境や地域による教育格差などの問題に直面する中で, 令和 4 年 12 月に改訂された文部科学省の生徒指導提要(改訂版)に, 「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning)」の用語が記載された。

今後, 人々の学業, 幸福, 健康 (Well-being) の向上を図る上で社会性と情動の学習 (SEL) の重要性が認識され, 当会に期待される社会的な役割はますます大きくなる。そのため, 日本 SEL 研究会 2023 年度総会において, 「日本 SEL 学会 (Japanese Association of Social-Emotional Learning)」に名称を変更するとともに, 一般社団法人として申請することが決定された。

日本 SEL 学会のビジョン

ミッション・ステートメント (2024/10/1 第 3 回理事会決定)

「本会は, 社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning: SEL) の研究と実践並びに普及啓発に努め, 人々の幸福な生活 (Well-being) の向上に寄与することを目的としています。

SEL とは、『情動』の認知と扱い方ならびに他人との共感的な思いやりのある『対人関係』を学習することです。『自己への気づき』『他者への気づき』『自己マネジメント』『対人関係のスキル』『責任ある意思決定』の5つのコアスキルを学び、よりよく生きるために必要な力をつけるプロセスです (CASEL, 2022)

本会は、エビデンスに基づいたプログラムの構成と科学的な効果の検証を大切にしています。Durlak ほか (2011) が行ったメタ分析では、一定の基準を満たした SEL プログラムは精神的健康や社会的スキルと学力の向上に効果があることが科学的に実証されています。

本会は、2009 年から前身である『日本 SEL 研究会』の活動を通じて、乳幼児の保育や学校教育にかかわる人々、広く SEL に関心を持つ人々と SEL の研究と実践の交流を深めてまいりました。この度一般社団法人の学会となることで、より多くの皆様とのつながりを大切にして日本と世界の SEL を発展させていきたいと決意するものです。」(2024 年 12 月現在一般社団法人化の途中で)

SEL とは (2024/10/1 理事会承認)

「Social and Emotional Learning (SEL) とは、社会的スキルや情動リテラシー (社会・情動的スキル) を育む教育的取り組みです。これは、特定のプログラムを指すわけではなく、社会性 (対人関係面) や情動面を重視した教育的取り組みの総称となります。さらには、プログラムとしての実施を超えて、他の教育活動と関連させた統合的な教育カリキュラムとして実践されることもあります。多くの場合は、特定の問題を抱えた子どもたちを対象とするのではなく、すべての子どもたちを対象に実施されます。SEL は世界中で実践され、その効果も科学的な検証において確認されています (Cipriano, 2023 など)。なお、情動とは一般的には感情や気持ちと表現されるもの

を指します。

近年、社会への適応やウェルビーイングの向上のためには、いわゆる学力である教科の成績だけではなく社会・情動的スキルが重要であることが多くの場面で指摘されるようになってきました。社会・情動的スキルは、よりよい人間関係を築くことや、適切な形でストレスに対処することなどに貢献するものです。社会・情動的スキルの重要性が指摘されるようになってきた背景には、見通しが立ちにくく変化の大きい社会の到来が予想されていることや、増え続ける不登校の問題などが挙げられます。こうした時代において、よりよく生きる力をつける社会・情動的スキルを育み伸ばす SEL への関心は年々高まっています。」

日本 SEL 学会の活動

研究大会 社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning : SEL) の研究と普及を図るために、会員相互の研鑽と実践の展開を図る研究大会を年に 1 回開催する。

第 1 回大会は、大会テーマ「SEL が創る教育の未来」のもと、2025 年 3 月 22 日～3 月 23 日に和歌山県立情報交流センター (Big U) で開催され、オンラインで同時配信ならびにオンデマンド配信された。シンポジウム「これらの SEL～グローバルな視点と地域に根差す SEL～」が渡辺弥生 (法政大学教授) の進行のもと、岡本啓史 (国際教育家)、永田佳之 (聖心女子大学教授)、松上京子 (田辺市議会議員) のパネリストの話題提供があった。また、記念講演「The Future of Education: Powered by SEL.」(Vitor Alexandre Coelho 博士: リスボン大学教授) が行われた。また、研究発表として「思いやりをもつことへの恐れ尺度の作成—高校生を対象とした予備調査の結果—」佐藤修哉、「SST 実施におけるプログラムの忠実性について」原田恵理子、「中学生における

対話的な学びとウェルビーイング」西田拓大・中村僚太,「幼児に向けた SEL プログラム〜くまのこプログラムの実践」三谷安希・久保教子・西田千寿子,「SEL の観点を取り入れた外国人留学生のための異文化間能力尺度作成の試み」永岡悦子・鄭恵先・明石聡子,「Social, Emotional and Ethical Learning の独自性と可能性——Social and Emotional Learning との比較から——」山本夏希があった。

研修会・勉強会・相談 会員の SEL に関する知識・技能の向上ならびに倫理的実践の推進をはかるとため、企画委員会による研修会（有料）を定期的に開催する。

また、会員の研究や実践の相互交流によって、あらたな研究や実践を展開する機会として、勉強会（会長無料）を定期的に開催する。

会員が SEL を実践する場合に、「どのようなプログラムを使ったらよいか」、「どのように導入したらよいか」、「そのための研修の進め方をどのようにしたらよいか」、「効果をどのように確かめたらよいか」などの疑問に応えるために、会員向けの相談活動を展開する。

研究誌の発行 「SEL 研究」(Journal of Social-Emotional Learning) を年に 1 回、誰でも閲覧可能な形（オープンアクセス）で発行する。論文の種別は、「原著論文」、「実践論文」、「展望論文」とする。このほか「依頼論文」や「特集論文」を掲載することがある。また、「実践報告」、「書籍紹介」、「大会報告」、「研修会報告」、「海外学会報告」等も掲載する。

ニュースレター 毎月、オンラインニュースレターを発行して、会員同士の交流と研鑽を図る。会員は、自由掲示板（関連の研修会案内を含む）、書籍情報等、関連学会情報、会員の実践活動などに投稿することができる。

関連学会等での活動

国内の関連学会等 国内の関連学会にお

いて、SEL の研究成果と普及を図る企画して発表等を行う。また、関連団体との連携活動を進める。

日本教育心理学会第 66 回総会(2024/9/14)では、会員企画シンポジウム「ソーシャル・エモーショナル・ラーニング——SEL の今とこれから——」の企画を宮崎昭（環境とところとからだの研究所）と松本有貴（徳島文理大学）行い、岡本啓史（JICA/モザンビーク）、眞榮城和美（白百合女子大学）、鈴木水季（郁文館夢学園）、山田洋平（福岡教育大学）が話題提供して、秋田喜代美（学習院大学）が指定討論を行った。

世界の関連学会等 世界の関連学会等において、SEL の研究成果と普及を図る企画して発表等を行う。また、世界の関連団体との連携活動を進める。

International Congress of Psychology (ICP) の ICP2024 の大会において、次のシンポジウムを開催した。

シンポジウム"Enhancing Well-being through Social and Emotional Learning (SEL) “は、Yuki Matsumoto が企画し、” 話題提供として、Effectiveness and acceptability of a gratitude diary intervention in schools” Yuki Matsumoto (Tokushima Bunri University), “Supporting Emotional Well-being in Children with Developmental Disorders with Community Resources” Yuma Ishimoto(Tottori University), “Evaluation of E-SEL to Develop Children's and Teachers' Social-Emotional Skills” Yayoi Watanabe(Hosei University),” Measuring Social, Emotional & Behavioral Skills in Japanese Children” Patrick Newell (Shizenkan University) が行われた。

シンポジウム "SEL Efforts for Various Populations“ は , Konishi, Chiaki (McGill University) ・ Julia Tesolin (McGill University)

が企画し、話題提供として、“Program Implementation for Social-Emotional Learning Among Preschoolers in Japan” Nishida, Chizuko (Japan Resilience Education Training Center), “Integrating Information-Communication Technology into Social-Emotional——Learning in Middle Childhood——” Oshio, Keigo (Ochanomizu University), “Implementing a Newly Developed Program for Social-Emotional Learning in Abused Adolescents” Akira Miyazaki (Institute for Body and Soul in the Environment), “Investigating Effects of Social-Emotional Learning in Underrepresented Populations in Canada” Konishi, Chiaki (McGill University) が行われた。

未来への展望

アメリカで開かれた SEL プログラムの国際会議で、ノルウェーの男性と意気投合したことがある。「このプログラムを世界中の子どもたちが学んで、お互いの問題を解決できたら、世界平和が実現できるんじゃないか。そうしたらノーベル賞ものだ」と。

ところで、「世界平和」とは、世界に問題や紛争がなくなった状態だろうか。否、多様な人々が関わりながら生活する私たち人類は、文化や経済や価値観の違いなどから問題と紛争を繰り返してきた歴史がある。「世界平和」とは、「問題や紛争は起こるが、暴力的ではない社会的スキルで解決できる世界」と考えるのが現実的である。

数学や科学などの自然科学は、人類共通の知識として発達し、世界で共通の自然科学教育が行われている。一方、文化や経済や価値観に関する感じ方・考え方は、国や民族や宗教などの違いによって多様である。その多様性が生み出す問題や紛争を、安全な方法で解決するための学習として「社会性と情動の学習 (Social-Emotional Learning: SEL)」を人類共通の標準として確立していくことが必要である。

利益相反

本論文において、開示すべき利益相反事項はない。